



雜

録

幼兒の汽車遊び

和歌子

廣々とした庭園や野原に遊んで駆け廻つて居つてさへも其活氣が溢るゝばかりの幼兒達、今日は昨日より降りついでにまだやまぬ雨の爲に、此處幼稚園(在東京市)の一室に籠城しなければならぬ事になりました。從て室の隅から隅まで幼兒の元氣でみち／＼と居るやうな心持がいたします。初のうちには窓から首を突き出して、「雨コン／＼

止ンデクレ」と三四兒が聲を揃へて唱へて居りましたが、やがて三十餘の幼兒はそれ／＼いろ／＼の遊をはじめました。あちらではオカッパサンの中央をチヨイと結へて鼠の尾のやうなオサゲを戴き白金巾の前垂をかけた之でも組中では年長な株の一女兒が主婦となり、四五の男女兒が子供になりて飯事が盛に行はれて居る。こちらの隅では只一兒一生懸命に積木をして居るものがある。又繪本を前に二三兒が何か話し合つて笑つて居るものもある。五六兒を集めて自分は宛然先生を氣取つて話をしたり唱歌をさせたりして居る兒もある。竹切を劍にした小兵士を操縦して居る小士官もある。そうこうして居るうちに最も複雑に大仕掛にはじめられ永い時間つゞいたのは汽車遊びでございしました。

まづ初に年長株の二男兒が何か相談らしい事をして居りましたが、やがて其邊にあつた十餘脚の腰掛を持って來ては向ひ合せくくつゝけて排べます。あんなに長くつゞけて何をするのかと思つて居りますと、最後に一番端の一脚だけは通常に置かずに立て、置きました。ハハ、汽車の烟突かしらんと思つて居りますと、果して其次の處には積木のはいつて箱を置きました。之は石炭でこゝは機關車なので。

さて列車ができ上ると技師は化して乗客募集係となり、室の各方でいろ／＼の事をして居る幼兒達に、「汽車ニオノリナサイ」と勸めてまはりまゝです。「ハイ」と來るのもあり、「アタシ今オバサンゴツコシテマスカラ」とことわるのもあるのを、頼み廻つてやつと十餘人の乗客ができて乗り込みました

すると今度は切手買兼改札係が乗客の中からも三人現はれて、長方形の木片を「チョキツ」と口で言ひながら一枚づゝ配つて廻る。之がすむと一人が「ポー」と言ふ。二三人が「ガタン／＼」と言ひながら兩手を大きく前後にまはす。之は車輪のつもと／＼なので。此際には改札係が何時の間にか驛長にも車掌にも機關手にもなりすまして居るので是れ即ち發車である。乗客の中では私が先生兼阿母さんに推され「コ、は一等イ、トコデス」といふ處に乘せて貰つて居る。「ガタン／＼」をまじめに一生懸命につゞけて居るのはとりもなほさず進行中なので、私が「此流車はドコカラ來タノデスカ」と問ふと、「新橋デス」と答へる。此語に連想して一兒は忽ち一同に向つて「流笛一聲ヲオウタヒナサイ」とすゝめる。皆歌ひ出す。之に誘は

れて今まで他の遊をして居つた幼児も皆追々集つて流車に乗る。とうとう室中の幼児が皆流車中の人になる。すこし立つと「サーコ、ハ上野デス」とふれてまはる「御辨當オベント——」と木を箱にいれて賣るもの「オモチャヤオモチャ——」と其邊にある玩具を賣るもの「本ヤ本ヤ——」と繪本を賣るものなど様々である。次に又「ガタンガタン」をはじめ、すこしして「大久保、大久保」と呼ぶ。「皆下リテ躑躅ヲ御覽ナサイ」と言つてまはる。私はじめ一同下車する。機關手車掌一同流車はうちすてゝおいて案内の勢を執り、「ホラコンナニキレイデス」と、をりしも机上の花瓶に生けられてゐる躑躅の花を指す。「キレイデスコト」などと言つて居ると、「今度は名古屋ニ行キマスカラ早クオノリナサイ」と親切にも知らせて呉れる。即

ち乗る。「ガタン——」がはじまる。「エ——名古屋ニ行ク時ニハ富士ノ御山ガ見エルンデス」とふれてまはる兒がある。「ドレドコニデスカ」と問ふと「ホラ御覽ナサイ」と大急に駈け出して往つて黒板に白墨で富士山を畫く。車掌先生三人また駈け出して、面白がつて畫く。忽ち、富士山が三も四も見ゆる事になる。立ち歸つて又「ガタン——」をはじめ「日光、日光」と呼び「モー下リテ下サイ」と一同に言ひ皆下りる。

次で客車も機關車も烟突も皆元の腰掛にかへり此遊は終りました。

其翌日も亦雨天で、やはり室内で右のやうな流車遊がはじまり、二度目の事として乗客も勝手が分つたと見えて、車掌其他の人の命令規律によく従つて居りました。そうして此日には重に大森、横須

賀を呼び、前におつた發車、進行、辨當賣などの事柄の外に新しく、「モー夜ニナリマシタ」「サーモ  
 「オキナサイ」「サーモオキナサイ」など、乗客にふれてまはる事が加へられ、前に木片なりし切符は紙片に改良せられ、私の居る處には「先生ノ  
 トコハキレイニシテ上ゲマセウ」として、車室に（實は腰掛のよりかゝりに）繪をぶら下げました。  
 又二三日の後雨天の日に、第三回のが企てられました。其時には以上の事柄の外に「ピシヤン」と言ひながら客車の戸を開閉する事、「暗イカラアカリヲツケマス」とことわりながら客車の方々に來て上に向いては「バチツ」と燐寸を擦り燈をとます事が加はりました。

右はまるで辻褄の合はぬ大人の夢の話の様ではございませうが、其背理的で大人からは可笑しい處

のまじつて居りますのが、それが即ち幼児の幼児たる處で、遊嬉は實に幼児の生命である。と申しますが、此流車遊をひとついたしても、幼児は幼児だけの規律を守つてする事でございませうから、規律に服従するといふ習慣も養はれますし、多勢でする事でございませうから、相互の協同一致といふ分子も無論必要でございませうし、一緒におもしろく遊べば遊ぶほど社交的感情も他愛の感情も温まれますし、其邊にある物をいろくに利用してするのでございませうから、思考工夫の力も養はれます。かく數へ立てますと此流車の遊びから幼児達が受けました利益はなかく、少くはございませぬ。又違つた側から考へますと、「幼児はこゝにいふ事に興味を有ちます。こゝにいふ事を觀察記憶して居ります。こゝにいふ風に思想を發表します。」

といふやうな事を、幼児自ら演じて私の目前に提出して居る事にもなりますから、私が此遊を見て感じた興味も一方でなく、又参考の材料にもなつた事でございます。

序に書き添へますが、それは、此遊は私が別に指圖めいた事を少しもいたしませんで、幼児になりて遊んだのでございますから、従て此遊びは全く幼児の力で企てられ考へられ實行せられましたので、衆兒は自由意志を實行する事のできる爲に非常の愉快を感じ、一回々々々々其しかたや事柄が進み、且つ注意の繼續の短い幼児の集合であるに拘らず、第一回には一時五十五分間、第二回には一時十五分間、第三回には一時五十分間といふ風に幼児としては永く注意がつゞけられ興味を有つて居つた事でございます。

江馬細香女史の詩(承前)

小林 雨峰

詩は心畫なり、前號所載の詩を讀むに、自から女史の心中には一種云ふべからざる煩悶の情あるに似たるを覺う、彼の詩は曾つて大垣藩士某女史細香の許にゆき其の門人たらむを請ひしに、細香は獨身生活に終りし人なるを以て、自分の如き獨身生活は他の倣ふべきとにわらずとて、懇ろに婦道を説きて歸へしやり、其際、彼の詩を賦せしものと云ふ、これ詩中に「唯恐人間疎嬾婦、強將風月做吾儕」と述懐せられたるもの、如し、然れども女史は頗ぶる孝親の人たりしが如し。

一、夢匆々半百人。 出懷縷々暗愴神。

月虧月滿望兼朔。 花落花開秋又春。

會寫畫疑手猶別。 已看書覺眼重新。

此身所願唯無恙、猶有高堂老病親。」

悠悠素願事多違、一夢人生何是非。

塵想羈因讀書淺、交遊濶爲出門稀。

抱愁枕上殘燈暗、待病窓前缺月微。

誰識閑鷗江畔睡、風波猶欲觸忘機。

高堂老病の親を思ふところ、抱愁、待病、自から女史の平生を見るべし、句また悠揚として誦するに足る。

思ふに余は曩きに女史の終生獨身に終りし原因を、女史は山陽の許に嫁するを肯んぜりしに由ると誌せしが、頃日、大垣江馬家の子孫某の云ふところによるに、そは全く婚嫁を排したるにあらざして父母の命に随つて孝心深き女史は遂に山陽に嫁せざりしものなるが如し。

某曰く、蘭齋翁の長男を門太郎と稱ず、不幸に

して天死したり、故に當然細香女史をして家督相續せしむるとなりしに、翁は自から謂へらく、れ多保(女史の名)は普通女子と總て其の氣風を異にせるものあり、故に一生獨身にて暮さすべし、とて女史を呼んで此旨を言ひ渡せしに、女史即座に肯諾したりしも、一生獨身生活の如何にも不都合なりしを思へりしが如しと、左の詩よく這般の消息を窺ふに足る。

次韻平戸藩鏡軒先生見寄作

一誤無家奉舅姑。徒耽文墨混江湖。却慚千里來章上。見說文場女丈夫。

題自書

孤房弄筆歲月移。一誤生涯何可追。聊喜清貞與渠似。幽蘭瘦竹寫寒姿。

哀然たる情思、遂に女史をして一箇有爲の女詩

人たらしむ。 (東洋風の倫理は兎角の議論われと

も) 獨身の女史、其の境遇や憐むべきもの多しと雖も、詩才横逸、當時の才媛中、拔群の聲價を占

めたと、到底、紅蘭女史等の以上にあらしめたるもの、豈に偶然ならんや。

女史の境遇よりすれば、女史の生涯は不平、憂愁また胸中に往來し、家庭の趣味等の如き、閑却

せるものありしは氣の毒なりしなり、只た夫れ詩篇の清新、明麗、巧緻のものを見出す、流石に凡

手にあらざるなり、左に出す如きものは女史にふさはしき作と云ふべ

し。清流典々蕙春霞。揮出輕舟眼界賒。沙岸盡頭村

忽現。遠林一樹認高花。(自岐阜舟行至黑殿) 梅月嬋娟奈夜何。微吟移步踏橫斜。滿身疎影清

如水。但認幽香不見花。(梅邊步月)

開晴雲意久商量。香霧沈々鎖海棠。自是花邊蝶

衣重。高飛不復遇隣牆。(春陰)

雙浮雙浴綠波微。不解人間有別離。戲取蓮心擲

池上。分飛要汝暫相思。(松蓮子打鴛鴦)

後詩の如き、造語婉約、情景宛然、濃かなる情、

切なる思を呈露し盡して餘すなしと稱すべし、本

色の述懐、哀思坐ろに動けるもの、字句の間に現

はれつゝあるにわらずや、予はこの女史がかの蓮

子を拈して、竊かに、鴛鴦の悠々として樂しげな

る様に接して、健羨の情禁せずして、人間の別離

かの鴛鴦は解せさるかと、怨恨不平の情を洩らし

たる、予はこゝに至りて女史の心中を察して悲哀

に堪へざるものあり、

某氏の説によるに、文化十年の頃、山陽尾濃に

遊び、蘭齋を藤江の邸に訪ひしに、翁は女史を山陽の門に入れしめ、山陽歸西の後、女史は文書の往復によりて山陽の教を乞ふ、山陽其の才慧凡ならざるを愛し、梁川星巖を介して、娶らんとせしに、翁は、女史の性好は必ず快諾せざるべきものならんと推斷して、直ちに之を斷りしに、女史は之をさきて、殘念なりとし、以來心中の悲を増せしを此れより甚だしかりしと云ふ、かの鴛鴦の詩を読み此の事を考ふれば、女史何ぞ泣かざるを得んや、失意の女史、不平の才媛、之を詩篇に洩らす、情めに禁せざるなきを得んや、詩として遠林春陰の句は之を鄭毅夫の詩と好一對なりと賞せり、其の雨竹、芙蓉を寫すに至つては、咏物の詩品として三唱すべきなり。

蒲江風雨望依稀。虞帝南巡去不歸。千歲難乾相

思淚。水頭秋冷泣湘妃。(雨竹)

閑紅寂寞照秋池。豈競春風桃李時。昨雨縱然狼藉盡。不將輕薄品寒姿。(雨後慰池上芙蓉)

後詩の如き詩品卓然、而かも其の間楚々として憐むべきを感むるところ、女史の志、傑出せるところを想見するに足る。甚だ敬すべし。(未完)

### 幼稚園の遊嬉

#### 十、二列行進

衆兒二行に整列し、樂器の柏子によりて步調を調へ、種々の方向に進行するものなり。

#### 十一、池の鯉

池の鯉の唱歌に伴はしむる遊戲なり。衆兒園を造りて池となり、五六人の幼兒中に入りて鯉となる始めに皆共に唱歌第一回を歌ひ、次に池となるも



の拍手して第二回の歌を唱ひ、鯉となれるもの兩手を振りつゝ、鱧を振るに真似て池中に浮遊す、第三回の歌「投げてやる麩を食へ」に至り衆兒は左手に持てる麩を右手に採りて投げやる状をなし、鯉は兩手の手頸を合せて口を造り、之を食する形をなす、第四回の歌に至り池は右又は左に廻轉し唱歌の終はると共に止む、鯉は同時に隨意の所に至り他兒と交替す

十二、お池の蛙

「お池の蛙」の唱歌に伴ふ遊戯なり、形は全く池の鯉と同じくし、中に入りたる幼兒の蛙となる、池となれる幼兒は右又は左に回轉しつゝ、「お池の蛙は」と唱ひ出せば池中の蛙は「くわつゝゝ」と唱ひつゝ、跳躍す、次に「何といふて鳴く」と唱ひ出せば又「くわゝゝ」と唱ひつゝ、跳躍し、

順次此の如くにして終結する時は蛙は隨意の所に止まりて他兒と交替す。

十三、雷

衆兒圓形又は直線に并ひ、最初一兒毬を持って樂器の音(雷鳴とす)にて順次其毬を次に送り、音の續く間回送して已めず、音の己みたる時毬を手にしたる幼兒は即ち雷に撃たれたるものとす。續きて他の遊嬉に移る時は雷に撃たれたる幼兒を出じて遊嬉の或役を務めしむる等のことをなすも宜し。

十四、輪くわり

甲乙二圓を造り甲は一點を斷ちて進行を始め、隨意に乙の間(大低二人目位)を潜り抜け、終はりたる時は又元形に復す、乙圓は直ちに又進行を始めて前の如くし、斯くして甲乙相互に遊嬉を繰り

反す。

### 十五、猫と鼠

衆兒圓形を形ち造り、二人の幼兒出でて甲は猫となり、乙は鼠となる合圖と共に鼠は圓の内外を逃げ回れば猫は随つて之を追ふ、周圍の幼兒は兩手を取りて鼠の出入に際しては入口を大にして之を便にし、猫に對しては之を小さくして不便ならしむる等のことをなす。

### 十六、輪拾ひ

環を幼兒數より一個或は二三個少くして圓形に排置し、幼兒は其外周に沿ひ音樂に調節して進行を始め、進行中突然音樂の中止したる時一齊に環を拾ふ、其拾ふこと能はざりし幼兒は此際遊嬉の列より脱せじむ、此の如くにして毎回其數を減じ、終に二人の幼兒のみにして一を争ふに至り、斯く

て最後に残りたるものを以て勝者とす。

### 十七、盲の遊

衆兒圓を作り、一人若くは二三人の幼兒、中に入りて目を覆ひて盲となる、圓は唱歌を唱ひながら右或は左に回轉し、終ると共に止れば、盲は或る幼兒の聲を聞きつけ歌の終はると同時に其兒を捕へて名を當つることを試み、當てられたる幼兒は代りて盲となり、當らざる時は幾回にても前の如くにする。

## 讀書餘錄

### 人情の勝利者

#### 撃

#### 水

シルレルの「最新話説中に於ける質量なる一行爲」といふ一篇の小品文は、義理と人情との争の

結果を極めて趣味ある筆で、記述したるものである。其梗概を記して見よう。

一部の史籍、一曲の悲劇の中には、時として吾人に示すに人類自然の性情の、最も人目を眩惑せしむる一片を以てするものがある。然も茲に、記載せんとする二個の獨乙人の近來に於ける奇聞の如き、亦頗る珍とすべきである。

烏爾莫男爵家の二人の兄弟は、計らずも同じ都會に住める烏爾都爾家の妙齡の一令嬢に人知れぬ思を懸けた。嬢の婉麗なる姿、嬢の典雅なる振舞嬢の優美なる感情は、相見る毎に男爵兄弟の深き思の種となつた、始めの間は、互の秘密を知らなかつたのであるが、慕る思は隠すに由なく、遂には、二人の間に發見せらるゝ事となつた。若し始から、戀の敵として兄弟同志が立ち向ふ事の如何

計り危険であるかを知つたならば、二人ともかくまで闇路に深く立ち入らなかつたであらう。

今や、嬢に對する二人の愛情は既に其極に達して、互に犠牲たることを肯んじ得ぬ程の激情に變じた。此不幸なる二人の情人の間に立ち、悲しむべき位置に陥つた嬢は、無下に一方を斥けて、一方に身を委す事の如何にも心苦しい所から、嚴として局外中立を守つて、いつまでも二人の愛情の争闘の結果に一任することに決したのである。果しもないに耐え兼て、兄弟は、遂は人情の勝利者として弟に向つた宣戰の布告を發した。

『弟、お前が嬢を愛して居る心の、已に譲らないことは、よく分つて居る。此場合、已は決して兄の權利がどうのこののといふ様なことは言はない。で、お前は此處に残つて居るがよい。己はこれか

ら暫く旅行に出かけて、兎に角、嬢のことを忘れ  
る事に骨折つて見る、……若し夫が出来たら、弟  
……忘れることが出来たら、もう嬢はお前のもの  
だ、己は天に向つてお前たちの祝福を祈らう、が  
然し、不幸にして、忘れることが出来なかつた曉  
には、其時は、お前も亦己と同じ様に出かけて行  
かなければならないよ」

かう言ひ残して兄弟爵は、すぐに獨乙を出て、  
さしあたり和蘭國へと急いだ。然しながら、到る  
處に嬢の姿を彼を追つかけて離れないのである。  
情人に別れ、故國を離れ、天外萬里の孤客となり  
て、彼は遂に羈旅の空に疾ひに至つた。絶望に絶  
望を重ねて編巢階段に到着した時、更に彼は恐る  
べき熱病の襲ふ所となつた、然も、嬢の容姿は、  
夢まばろしの間にも、正氣なき彼の全心を司配す

るのである。醫師も既に術の施すべき餘地ないこ  
とを斷じた。而してたゞ一縷、彼の絶はなんとす  
る氣息を繋ぐものは、嬢を得るといふ保證にある  
のだ。之によつて漸く彼を死の手から奪ふことが  
出来た。旅の疲と、のみならず九死の病から歸つ  
た彼の相格は、全く半死の骨と皮許りで、わりし  
元の面影とは、とても似ても似つかない。

「弟、又歸つて来た。己の心盡しは神が知つて居  
る、己には此上もう言ふことが出来ぬ」

かう言つて、力ない身を嬢の體に倚せて、やつ  
と支へた。

兄弟爵は猶豫なく心を決した。一週間と経た  
ない中、甲斐なくしき旅装束で出て来て兄に言ふ  
には、

「兄さん、卿は心の苦をお忘れになる爲め、は

る。和蘭までもお出でになつたそうじゃありませんか、私は寧のこと、もつと遠方まで行つて見ようと思ひます。然し兄弟のよしみとして、たゞ一つの御頼は、此後、私が何處の國からか御音信をするまでの間、どうか令嬢との御結婚を御待ち下さい。神の恩で、萬一卿より仕合はせよく行きましたら、其時は、嬢は兄さんのです。私は永遠に御二方の幸福を神かけて念じます。不幸にして、又私も卿と同様の結果にたち至りましたならば、ア、其時は、左様、神様がよくして下さいませしよう。兄さん、御機嫌よく御暮しなさいそして、此封印した小箱は、私が去つて仕舞つた後でお開き下さい。私は之から、波多比亞に行きます」

別離の涙、拂ひも敢えず、待たせ置いた馬車に

六十  
飛び乗つて、二人を後にした。兄男爵は殆んど氣を失つた様に其後を凝視めて居る。次第に遠ざかりて行く馬車の轍の響きの音は、まことに彼の心の底まで響き渡るのである。現在血を分けた弟、よも生きては歸るまいと思へば、殆んど立つても居ても居られないのである。此際、令嬢は……いや、之は話の終はりに至つてよく分る。

馬車の姿は遂に隠れた。彼の小箱を開いて見ると、何ぞ計らん、其中には、獨乙國內に於ける弟男爵の所有財産悉皆の證文が納めて居た。彼が波多比亞に到着した後、兄男爵に譲り渡すといふ書き付けを添へて、

其後弟男爵は、和蘭の商船に便乗して、無事に彼地に到着した、そして數週間経つてから、兄男爵は其書面に接した、書面の意味の大意は、

「全能の神に感謝す。此處に新世界に着してより  
 我は我が心の爽快なること殆んど彼の詢教者の夫  
 の如きを以て、吾等二人の愛情に付きさて考ふるに  
 至りたることを。珍らしき景色、新なる運命は、  
 忽ち我が狹隘なりし従前の思想界を擴張しつ、  
 全能の神は我に與ふるに、友愛の爲めに最大の犠  
 牲を供すべき力を與へたり、嬢は……ア、一片の  
 涙の滴下するを如何せん、女々しとな咎め給ひそ  
 ……最後の涙なるものを……我は遂に打ち勝ちぬ  
 ……嬢は兄上のものなり。然れども兄上、我が心  
 より彼女を忘れんとの如何許り容易ならざりしか  
 は、よくも知り給はん、さらば、ゆめ、彼女を得  
 られつることの如何許り困難なりしかを忘れ給ひ  
 そ……未來永劫、彼の天使を遇するに、幼き愛情  
 の今兄上に教ふるが如くせられよ、願くは、兄弟

フエルオヒトニス  
 の遺寶として末長く彼女を勞はり給はんことを  
 さらは兄上、さきくいませ、結婚式の日に付きて  
 は、もはや書き送り給ふに及ばず、我が痛殤の血  
 液は尙未だ湧きて止まねば、たゞく兄上の事な  
 きを報せられよ、全能の神、又天外に在る我を祝  
 福し給はんことは、我が行爲こそ證人たれ……  
 婚儀は芽出たく、兄男爵と嬢との間に結ばれた  
 併も、幸福の夢は僅に一年にして破れた。男爵夫  
 人は病みて死なれたのである、死ぬる間際になつ  
 て、夫人は日頃最も親賴せる一侍女に告ぐるに、  
 其胸中の最不幸なる秘密を以てした。彼女の愛  
 は實に弟男爵に向つて、より強かつたのでわ  
 る。

この二人の男爵は今尙、現に存命せられて居る  
 兄男爵は獨乙國で立派な財産を所有し、新に妻を

迎へて。弟男爵は波多比亞の地で、最も幸福に  
最も有力なる人として繁榮を極めて居る、而し、  
盟つて、妻を娶らぬとの最初の決心を、今以て守  
つて居るとの事である。



●女子高等師範學校

先月十三日午前八時より

同校附屬高等女學校に於ては、第五回演習會を開  
會せり、始めに唱歌「みがかずば」の合唱あり、  
演習の事項は、説話、唱歌合唱及獨唱、書畫席  
書、ピアノ聯彈及獨奏、ワイオリン合奏、對話、  
英語暗誦、英語演説、朗讀にして、十二時唱歌た  
のしわれを合唱して散會したりといふ▲暹羅國皇  
后陛下の派遣にかゝる本邦留學女生ピット(十五  
年)、ジョン、ノーワン、リー(各十四年)の四  
名は、先月十五日文部省令十五號外國人特別入學